

イニシエーションまでの過程

——和尚ラジニーシ・ムーブメントの場合——

伊藤 雅之

本稿の目的は、和尚ラジニーシ・ムーブメント（ORM）に参加する日本人がどのような過程を経てイニシエーションを受ける至るのか、またその過程に関与する要因が何であるのかを究明することである。以上の目的のため、筆者は日本の7都市において35名の信奉者とのインタビューを行った。本稿では、参加者が、1)ORMに出会う以前の「背景的」要因と、2)ORMと具体的なインタラクションをする「状況的」要因に分けて論じ、ORMの特異性を明らかにする。

1. はじめに

1960年代以降、アメリカをはじめとする欧米諸国では数多くの宗教が出現し、それらは総称して新宗教運動 (New Religious Movements) と呼ばれるようになった⁽¹⁾。新宗教運動の特徴の1つは、その中に東洋の宗教的伝統の影響を受けたものが多くみられたことである (Bellah 1976)。また、和尚ラジニーシ・ムーブメントをはじめとする大半の新宗教運動は、その信奉者が比較的裕福な家庭に育った、教育程度の高い30歳前後の若者であるという共通点をもっていた (Volinn 1985)。

日本においても、新しい宗教現象が70年代以降みられるようになってきている。まず、若者が新宗教へ入会する割合が増加し始め、また入会の動機も、空しさからの救いや神秘体験への興味が挙げられるようになってきた (西山 1986; 島藪 1992a, 1992b)。さらに80年代になると、教団という明確な形態はとらないが、

「個人の意識変容」を鍵とする宗教文化が定着し、「精神世界」の本のコーナーがそのシンボリックな空間として考えられるようになった (島藪 1992a, 1996)。このコーナーにはラジニーシの著書も多数おかれている⁽²⁾。

本研究の課題は、先進資本主義諸国で広まった宗教運動群に参加する人々の内面世界を理解することである。具体的には、和尚ラジニーシ・ムーブメント (Osho Rajneesh Movement、以下、ORMとする) を事例として取り上げ、そこに参加する人々がイニシエーションを受けるに至るまでの過程を究明する⁽³⁾。ORMは、欧米に広がった代表的な新宗教運動の1つであり、また日本の「精神世界」ブームにおいても過去10年以上にわたり重要な位置を占めている。それゆえ、本稿で説明するORMの事例研究を通じて、新宗教運動一般の入信過程に関与している諸要因を理解する手がかりが得られる可能性は大きい。またORMが広がった現代社会の特質に関しても、何らかの示唆が得られるのではないかという期待を抱きつつ、ORMの

参加者の内面世界に迫っていきたい。

ORMは、和尚ラジニーシ(1931-90)によって60年代後半にインドで創始され、欧米を中心に広がった新宗教運動である。ラジニーシは、「生」に対するホリスティックなアプローチをとり、人々にすべての行為や感情を抑圧することなく、ありのままの自分を受け入れ、瞬間、瞬間をトータルに覚醒することのみが必要であると説いた。彼の思想はタントラや仏陀、老子、禅仏教に影響を受けている。60年代後半には革新的思想のためインド中に論争を巻き起こしたこの運動も、70年代にはアメリカ、イギリス、ドイツなどの欧米諸国から対抗文化の影響を受けた若者がインド・プーナのラジニーシのもとに集まりだすようになる。数ヵ月から数年プーナに滞在した後、自国に帰国した彼らは、世界各地に瞑想センターを設立した。ラジニーシの弟子たちは「サニヤシン」(sannyasin)とよばれ、組織的な宗教形態に縛られない個人的ネットワークで結ばれている。日本人サニヤシンは現在約3千人いると考えられ、東京をはじめ全国20数ヵ所の瞑想センターを拠点とする各種活動と、プーナで行われるグループ・セラピーや、瞑想、コミュニケーション活動に参加している(4)。

欧米ではORMは代表的な新宗教運動の1つとして取り上げられ、広範な研究が行われてきた。ORMの研究は、ラジニーシの思想(Wallis 1986)を扱ったものから、カリスマ性の変遷(Palmer 1988)、セラピーの機能(Palmer and Bird 1992)やその内容(Amitabh 1982)まで多岐にわたる。特にラジニーシがアメリカに渡り、オレゴン州に実験的共同体を設立した期間(1981-85)については研究が集中し、コミュニケーションにおける組織形態(Carter 1990)と近隣の一般住民との衝突(Latkin 1992)、またコミュニケーション

住民の意識(Latkin et al. 1987)等が調査された。しかし、サニヤシンたちの生活世界に焦点をおいた研究は、カーティスの論文(Courtis 1991)が挙げられるのみであり、入信過程を体系的に調査した研究は提出されていない。日本では、ラジニーシを「精神世界」の一部として言及した一般書は多いが、具体的にORMを扱った学術研究はこれまで行われていない。

本稿では、従来のORMに対する研究では解明されてこなかったサニヤシンの入信過程を対象とし、個人がイニシエーションに至るには如何なる要因が関与しているのかを究明することを目的とする。まず次節においては、本論の前提となる調査方法と分析枠を述べる。つづく第3、第4節ではサニヤシンのイニシエーション過程を扱うが、その際、1)彼らがORMに出会う以前の「背景的」な要因と、2)ORMとの具体的なインタラクションという「状況的」な要因に分けて論じていく。まず第3節では、背景的な要因として、信奉者の「悩み」、「パースペクティブ」、「探求行為」の3つを論じる。そして第4節では、状況的な要因に関連する、「ラジニーシの本との出会いと人生の転機」、「信奉者およびラジニーシとの関係」、「信奉者以外との人間関係」、および「徹底したインタラクションと意識変容の体験」について検討していく。最後に、以上の7つの要因を検討した結果、ORMに特徴的にみられる事柄を総括して本稿を締めくくる。

2. 研究方法

本研究では、日本人サニヤシンの内面的世界を理解するために、インタビューを主要な方法として用いた。まず3ヵ所の瞑想センターの代表者や、筆者が研究の過程で個人的に知り合っ

た人達の協力をえて、約120名のインタビュー候補者のリストを作成した。その中から、男女比、イニシエーションを受けた時期、コミットメントの度合、および地域性の偏りが無いよう配慮し、1980年から93年までにイニシエーション（テイク・サニヤス）を受けた男性21名、女性14名の計35名を調査対象にした。インタビューは、93年12月から94年4月、94年9月、95年8月の期間に仙台、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の7都市で行った。インタビューの対象者は26歳から44歳までの男女で、35人中24人が大卒、イニシエーションを受けた年齢は10代2名、20代28名、30代5名であった。

インタビューでは、信奉者の生活史を幼少の頃から年代順に質問しながら、ラジニーシに出会う以前の価値観や興味対象から、現在のORMとの関わりに至るまでを詳細に聞いた。その際、単にサニヤシンの自己報告におわらぬように、客観的な事実確認もできる限り行うよう留意した。インタビューは、一人につき2～6時間行い、会話はテープに録音した。調査の終了後、録音したテープの主要な内容を書きおこし、35名の個人ファイルを作成した。個人ファイルを繰り返し読むことにより、ラジニーシの弟子となった人達の入信プロセスの分析を進めていった。

本稿では、インタビュー・テープの分析・解釈から導き出された入信に関連する諸要因を論じていく。筆者は、サニヤシンがイニシエーションを受けるに至るさまざまな要因を独自に分類していったが、それらの項目はロフランド＝スターク・モデル（以下、L-Sモデルとする）の提示する7つの条件にほぼ集約されることが分かった。それゆえ、本稿ではサニヤシンの入信に至る要因を秩序立てて記述するため、L-

Sモデルを基本的な準拠枠とすることにする。

L-Sモデル (Lofland and Stark 1965) は、ある個人が入信に至るまでの必要かつ全体で十分となる7つの条件を提示している。その条件とは、ある人が1)持続的な、激しい緊張 (tension) を経験したことがあり、2)その問題を宗教的なパースペクティブにより解釈しようとする傾向があること、3)その試行錯誤の過程で自らを宗教的な探求者と位置づけて、行動することである。さらに、4)人生の転機 (turning point) で入信する宗教と出会い、5)その集団内の一人以上の信者と感情的な絆が形成され（もしくは前もって存在し）、6)その宗教以外の人達との愛着は存在しないか弱まり、7)正真正銘の入信者となるためには、メンバーと集中的に相互接触をする必要がある、というものである (1965: 874)。このモデルはプロセス・モデルであり、7つの相互に依存する要因が1つ1つ累積して最終的に入信に至るとする。はじめの3つの条件は入信する宗教に接触する以前から存在する「背景的」要因であり、残りの4つは潜在的入信者としてすでに信者であるものとの間で生じる「状況的」要因である(4)。

以下において、サニヤシンとなった人達がL-Sモデルが示す7つの条件を1つずつ満たしながら、最終的にイニシエーションを受けるに至るプロセスを描写していく。その際、ORMに特有の要因がある場合には、L-Sモデルを適宜補いつつ論じていくことにする。L-Sモデルというスタンダードなレンズを用いることによって、逆にその枠組みでは把握できないORMの特異性が浮かびあがってくるはずである。次節では、サニヤシンがORMと出会う以前の背景的な要因を、「悩み」、「パースペクティブ」、「探求行為」の順に考察していくことにしたい。

3. 入信プロセス―入信者の背景的な状況

1) 悩み

ロフランドらによれば、入信への第1の必要条件は、入信者が人生の一時期に激しい緊張(tension)を経験していることである。緊張、すなわち悩みの原因として、貧しさ、病気、あるいは人間関係から派生した問題などが考えられる。サニヤシンは、イニシエーション以前に特定の悩みを抱いていたのであろうか。また、抱いていたとすれば、どのようなタイプの悩みであったのか。個人がどのような種類の悩みをもつかは、信者の性格や社会的属性に加え、信者が育った時代背景も密接に関連している。サニヤシンたちの大半は大卒の教育歴と中流の中ないし上の経済的背景をもつ。また、イニシエーションを受けた年齢は、20代半ばから30代前半に集中している。彼らが、ORMに出会う前に、どのような悩みを抱えていたのかを以下で検討していきたい。

Kさん(女性36歳、80年、21歳の時イニシエーション)が、人生に疑問をもち始めたのは、13歳の時であった。それまでは生徒会で書記をするなど、意見をはっきりいう「外側に向かう感じの子」だったという。それから次第に内側に向かいだすようになった。

みんなと同じなのがいや、制服とか、集団とか。例えば、どうしてみんな毎朝起きて、同じ格好して、学校なり、会社なり行って、・・・学校卒業して、就職して、結婚して、子供産んで。もうそれじゃ、人生見えてるじゃない。どうして、そんなに分かりきってるような、ルールに乗ったような、人生を生きること耐えられるんだろうか。・・・

本当に分かり察しうるような人生だったら、自分はもう自殺したい。もう生きてる意味はないって思った。

彼女の悩みは、70年代以降の経済的に豊かな日本社会に育った若者の典型的な悩みとして理解できる。彼らは、自分の親の世代が戦後の貧しい時期を経てようやく獲得した、「学校卒業して、就職して、結婚して、子供産んで」という状況を当然のことと考えており、本人もそれを望めば容易に手に入れられると思っている。しかし、将来自分が同じような道をたどりたいとは考えておらず、しかもそのような生き方に人生の意味を見いだせないのである。

次のIさん(女性32歳、91年、27歳の時イニシエーション)の場合、人生に対する不安がはっきり現われたのは、大学を卒業後、就職してからであった。しかし、問題の内容は、Kさんに類似している。Iさんは、大学生の頃から「もやもやした、本当にこれでいいのか」という漠然とした感覚があった。彼女は東京で就職するが、漠然とした不安は続いた。「仕事はとっても楽しいんだけど、何か自分のもっと根本的なところから間違ってるんだという感じがした。そして、半年間東京で働いた後、会社を退職し、卒業旅行で行ったバリ島に再びむかった。彼女はそこで7ヵ月を過ごすことになる。彼女がラジニエーションの存在を知るのは帰国後1年以上後であり、サニヤシンとなるためインドに向かったのは、さらに2年後のことである。

以上の事例以外でも、インタビューした人達との会話では、「どう生きてゆけばいいのか分からない」、「何かがおかしい」などの言葉がよく聞かれた。彼らに共通するのは、ある種の空しさを一定期間以上感じていたことである。一方、サニヤシンたちは物質的、肉体的、あるいは対人関係から直接派生した問題についてはあ

まり語っていない。前出のIさんは「仕事もすごくうまくいったし、配属されたところもいいところだったし、上司にも受け入れられたし、全然問題ないんだよ。だけど、おかしいという感じ」と語っていたが、その言葉はこのような悩みの状況を簡潔に表わしている。つまり、将来サニヤシンとなった人達は意味の喪失、人生の方向性や目標の欠如という精神的な問題に直面していたことがわかる。

このようなサニヤシンになった人達の悩みは、日本の新宗教に入会した若者が抱えていた問題と共通している。70年代以降、新宗教への入会動機は、貧・病・争に加え、空しさからの救いが挙げられるようになってきた。若者は、経済的な豊かさの反面、高度に分化した社会構造、都市化、核家族化、官僚制の発達の中で、生きがいを見つけにくくなっているといえよう⁽⁶⁾。つまり、サニヤシンになった人達の抱えていた「空しさ」の問題は、70年代以降に新宗教に入会した若者の典型的な悩みであったといえよう。このように、人生の意味の喪失を経験するだけでは、ORMとの関係を特定化することはできない。しかし、悩みを持つことは、最終的にサニヤシンとなるに至るための第1にクリアすべき条件（大前提）として理解する必要がある。

2) パースペクティブ

それでは「空しさ」という悩みを抱えていた若者の中で、宗教の世界にその解決を求めたのは、どのような人達だったのだろうか。L-Sモデルの第2の背景的要因は、悩みを抱えた人達がそれを宗教的なパースペクティブ、すなわち超越的な存在や、論証不可能な宇宙の構造、あるいは先祖の因縁などに結び付けて問題を解釈しようとすることである。この要因が入信の条件の1つとなるのは、悩みを抱えていてもそ

れを別な手段を用いて解消する可能性もあるからである。つまり、人生の目標の欠如という悩みを抱えていても、その問題を宗教に結びつける必要はないからである。例えばロフランドらは別なパースペクティブの1つとして政治的パースペクティブを挙げている。自己の抱えた悩みの原因を社会体制の問題点のなかに見いだして、学生運動や各種の社会運動を起こすことにより解決しようとする人達も想定しうるのである。

サニヤシンたちがORMと出会う以前に持っていたパースペクティブを理解するためには、L-Sモデルが提示する「宗教的」パースペクティブを広義に捉える必要がある。というのは、インタビューしたほとんどの人達にとって、宗教一般に対するイメージは、かなり悪いものであったからである。宗教を否定的に捉えて、「うさん臭いもの」、「馬鹿げたもの」、「偽善」として考えるものがほとんどであった。さらに、80年代後半にサニヤシンとなった人達の間では、ラジニーシも否定的に扱われたようである。

和尚のことは、もっと前から本屋とか、宝島（の本）とかで、ああいう人いるんだというのは知ってたけど、自分には縁のない人。本屋さん行っても、とって開けてみることもしなかった。何かうさん臭いおじさん、新興宗教みたいに思ってた（Nさん、男性30歳、92年、26歳の時イニシエーション）。

このように、ラジニーシの本が日本に紹介され、大型書店で一般に置かれるようになった80年代半ば以降は、ラジニーシも「うさん臭い」対象として捉えられていたのである。

それでは、サニヤシンたちのパースペクティブの特徴は何であったのだろうか。どのようなパースペクティブから自己の抱えた問題を解釈するのかには、個人の心理的特性や社会的属性

に加え、時代の影響も大きい。まずは日本の社会状況が個人のパースペクティブに与えた影響について考察することにしたい。

時代の推移と個人のパースペクティブの変化との関係を理解するために、Jさん（44歳、80年、27歳の時イニシエーション）のケースをみてみたい。彼は、高校の頃、地元の名古屋で学生紛争を経験した。1970年初頭である。全共闘が東大の安田講堂を占拠した時、彼は高校2年生だった。代々木公園まで集会に行くほど熱心な赤ヘルだったという。名古屋の交番襲撃事件にも参加し、火炎瓶を投げ込んだ。学校ではアマチュアバンドを結成し、社会派のフォークソングを歌っていた。大学に進学してからも、音楽活動に専念した。しかし、時代とともに、彼の関心は外的な社会的変革から内的な自己変容に移っていったという。

個人的なものが、どれだけ価値をもつかということに焦点を置き始め・・・アメリカの公民権運動から発達した、ラディカルなフォーク・ソングってというのが、68～69年に日本に上陸して、そんで関西中心にそういう唄が巷で歌われ始めた。「今の自分たちの社会の状況を見つめ直そう」というところから「自分にとっての価値」というものに変化していく。「社会は自分からしか変わっていかない」、「自分の個人的な理由を大事にしよう」という流れに変わっていった。

Jさんの心境の変化は、政治的パースペクティブから、「意識変容」のパースペクティブへの移行として捉えることができる。インタビューしたサニヤシンたちのほとんどは、Jさんよりも若く、学生紛争の影響もあまり受けていない。彼らは、はじめから「社会は自分からしか変わっていかない」という時代の潮流にいたのである。

例えば、前出のKさん（女性36歳、80年、21歳の時イニシエーション）は、高校時代の関心を次のように語っている。

・・・政治、社会への関心なかった。でも、人間の意識が変われば、世界が変わるというのはよくわかった。だから自分の意識を変えることに興味があったのね。例えば、自分が詩を書いている時とか、突然くるのよね。意識が突然拡大する。普通、狭い意識で生きてるじゃない。・・・それで次に興味もったのが、「どうしたら自分の意識を変えられるのか」ということ。

Kさんは現在36歳で、先程のDさんより8歳若い。彼女の捉え方には、政治的パースペクティブは含まれていない。「人間の意識が変われば、世界が変わる」という認識は、ほかのサニヤシンの人達にも共通する暗黙の前提であった。政治や社会への関心が薄れるにつれ、自分の内面への興味が強まるという傾向は、70年代後半以降日本のサブ・カルチャーの1つとして、一般に浸透していったのである。サニヤシンとなった人達の背景を理解するためには、このような時代的な要因に着目する必要がある。

もちろん、個人がどのようなパースペクティブをもつかは、社会状況のみでなく、個人の性質が関与していることは言うまでもない。例えば、神秘体験をした人は、「人間の意識が変われば、世界が変わる」という発想になりやすいようである。数人のサニヤシンがラジニーシに出会う前のある種の神秘体験をしていた。Wさんは、高校、大学を通じて、いろいろな疑問を持っていた。「私が欲しいものは、何なんだみたいな感じで、すごく癒されない孤独があった」という。主に心理学関係の本に解答を求めたりした。森田療法に関する本は特に興味をもって読んだ。Wさん（女性30歳、89年、2

4歳の時イニシエーション)は、高校の時の神秘体験が、その後の心理学への興味を持続させる要因となったと考えている。

高校の時、悩み悩んで、悩み疲れた時、ちょっとした神秘体験をする。・・・それがあって、「受け入れる」じゃないけど、何か体の力がガクッと抜けてさ、「いいんだもう」と・・・スーッと変わった時に、1ヵ月ぐらい、森羅万象というか、全部のものがつながって、自分がその一部で、すごく愛されている・・・そういうのが、バーツときてね。木とか風とかが、スーとまざまざとやってきてさ。それはすごい幸せなことやったんやけど、それが1ヵ月ぐらいあってなくなって。また疑問がわいてきて、もとに戻っていく。そしたら、・・・今までみたいに元に戻れない、というか・・・「もとの世界と違う何かがあるんだ」という、・・・で、そこから探求じゃないけど、「何なんだ、何なんだ」という感じになって。

このようにサニヤシンになった人達は、ラジニシに出会う以前から、「意識の変容」をキーワードにするパースペクティブをもっていたと言える。島蘭(1992a, 1996)は今日の宗教ブームにおいて「精神世界」に代表されるような、組織的宗教ではないがまとまった世界観をもつ宗教文化を「新霊性運動(文化)」と概念化した。この宗教文化は、70年代後半から顕著になり、先進資本主義諸国で共通してみられる現象であるという。新霊性運動における思想や態度の特徴には、1)個人の意識変容を究極的なものへ至るきわめて重要な指標と考えることや、2)自然や人間に内在する霊的なものを尊び、それと一体化することを目標とすること、また、3)個人の自律的なスピリチュアリティの開発をめざす、自由な個人のゆるやかなネッ

トワークによりつながっていること等がある。サニヤシンたちは、ORMに出会う以前よりこの「新霊性運動」的なパースペクティブに関心があったと考えられる。

以上の考察の結果、サニヤシンたちはいわゆる「宗教」には拒否反応を示しながらも、広義の宗教文化である「新霊性運動」的なパースペクティブには関心があったといえる。

3) 探求行為

L-Sモデルが第3に挙げる入信への背景的な条件は、自己を宗教的探求者として位置づけて、具体的な探求をしているかどうかである。第2の条件が個人の認知や態度レベルでの特徴についての条件であるのに対して、これは人々の行動レベルに関係する条件である。ロフランドらは、具体的な例として、いくつもの教会をわたり歩くことや、さまざまな宗教書を読みあさりながら自己の問題を解決しようとする行動を挙げている。

この点に関してサニヤシンたちは、厳密な意味での宗教的な探求ではないまでも、「スピリチュアル」な探求を行っていたと考えられる。サニヤシンになる以前にほかの新宗教に入会していた人は、インタビューした35人の中で2名であったが、ORMに興味をもつ以前にインド、ネパールやバリを旅行したことのある人達が7人いた。また「精神世界」の本や、ハクスレー、ヘンリー・ミラー、老子、荘子らの思想家たちに高校や大学時代に傾倒していた人も10数人いた。以下では、具体的な探求の1つの事例を検討したい。

Sさん(女性36歳、82年、22歳の時イニシエーション)がインドに初めて行ったのは大学2年の時であるが、そのきっかけはアメリカの若者文化の影響であった。高校の時、サーファのライフ・スタイルを知った。聴く音楽

もカリフォルニア・ソングだった。「それを聴いているだけで、日本の演歌の世界--重くて、暗くて、ダサイ世界--それと違うもの・・・音楽をかけるだけで、そこだけ違う世界ができた」と感じた。76年頃の出来事である。「宝島（の本）にあったような、リベラルなもの、ドラッグ・カルチャー、フラワー・チルドレン(7)」そういうものにすごく憧れた。70年代の終わりには、「精神世界の旅だとか、バークレーの大学にいくツアー」があったという。

大学1年生の19歳の時、アメリカを旅行する。為替レートも高く、現在のように気軽に大学生がアメリカを旅行する習慣もなかった頃である。ニューヨークからサンフランシスコまで1人で旅行する。サンフランシスコには知り合いが何人かいた。

フラワー・チルドレンの発祥地、LSD、音楽、私にはカッコよかった。サンフランシスコでいろんな人達に会って、いろんな店へ行って「すごいなー」と思った。でも、そこで知ったのは、すでにもう時代的にはインドだったの。そういうフラワー・チルドレンの人が目指しているものはインドだったの。やっぱり、ビートルズがマハリシ(8)のところに行ったり、サンタナもそうだし・・・そういう感じで、アメリカから帰ってきた時には、もうインド行くこと決めてた。79年の時のこと。それから出会う人みんなインド行ったことある人ばかりになる。

その過程で、ラジニシの存在も知った。大学2年の夏、インドへ向かう。タイ、ネパール、そして陸路インドへ。ベナレス、ブッダガヤ、カルカッタ、ボンベイを旅してから、プーナへ行った。プーナには2か月滞在し、日本へは81年の3月に帰国する。半年以上の旅であった。

Sさんがたどった道のりは、厳密な意味での

宗教的な探求行為ではない。アメリカでもインドでもいわゆる宗教と関連する場所を訪れたわけではないからである。しかし、彼女の旅は、観光名所めぐりでも、ショッピングをするためでもない。それは内面に関わる漠然とした何かを求めての探求であったのである。

Sさんの事例はちょうど70年代後半にインドへの旅が日本で密かなブームになった頃の出来事である。この時期以外でも、インタビューした人達の中には、インドとネパールを長期間旅行した者、ドラッグ体験をするためにアメリカやインドへ行った人、バイクで日本を縦断した人、農場で1年間働いた人、バリ島に長期滞在した人、サイコ・ドラマの劇団に所属した人などがいた。また、具体的な行為にはなかなか至らなくとも、「精神世界」の本を読んでいた人達が多くいた。このような彼らのラジニシに出会う以前の行動を、新霊性運動を背景にした、「スピリチュアルな」探求行為として捉えることができる。

以上、サニヤシンとなった人達がORMに出会う以前の状況を、「悩み」、「パースペクティブ」、「探求行為」の3つに焦点を絞って究明してきた。これら3つの要因が累積的な性質をもつことは強調しておく必要がある。人生の目標の欠如などの悩みをもつ若者は多い。その中で、「新霊性運動」的なパースペクティブから自己の悩みを理解しようとする人は限られる。さらに、その中で具体的な探求を行った日本人となると、人数はかなり限定されてくることだろう。サニヤシンとなった人達は、これら3つの条件を満たした者の一部であるといえる。特に、第3の条件である探求行為に関連するサニヤシンの行動は、ORMを特徴づけるものと捉えてよいだろう。彼らの探求は、一般常識をはるかに超えた活動的な性質のものだったからである。

それでは3つの条件を満たした若者の中で、最終的にサニヤシンとなるためには、さらに如何なる条件を満たさなければならないのだろうか。次節では、彼らがどのようにORMと出会い、具体的なインタラクションを行っていったのかをみていくことにする。

4. 入信プロセスII—状況的な要因

4) 本との出会いと人生の転機

ロフランドらによれば、入信に必要な第4の条件は入信する宗教と接触する時期の問題である。潜在的な信者は、特定の宗教に出会う直前か、ちょうど出会った時に、人生の転機に直面していることが必要になるという。人生の転機とは、過去から継続していた行動様式が途切れたり完結したりして、新しい生活を送る義務や機会が生じた状況である。病気、離婚、失業、転勤や引っ越し等が転機の具体例である。また、若者にとっての転機は教育に関連する出来事が多く、学校の卒業や中退、受験の失敗、あるいは入学に伴う転地などが挙げられるという。

この点に関して、サニヤシンたちの状況とL-Sモデルとは厳密には一致しない。というのは、彼らのORMとの出会いは転機よりかなり前であることが多いからである。大多数のサニヤシンたちはラジニーシの本を通じて初めて知ることになる。インタビューした人達の約3分の2は、本人が直接ラジニーシの本を書店で見つけている。残り的人達は、サニヤシン以外の友人、知人から本を紹介され読みだしている。彼らは、ラジニーシの本を読んだ時に、大きな衝撃を受けていた。まずは、本を読んだ印象を検討したい。

『存在の詩』⁽⁹⁾を、1日1講ずつ読んで、途中まできたらもうこれは止められない。その

まま一気に読んだ。読み終わった時には光の滝で打たれるような感覚になった（Yさん、男性36歳、80年、20歳の時イニシエーション）。

このように、ほとんどすべてのサニヤシンにとって、ラジニーシの本は衝撃的であったようである。10数人の人達から「求めているメッセージが、本の中にあつたような気がする」という言葉が聞かれた。彼らが求めているものとは何だったのだろうか。彼らが特に印象的におぼえている本のメッセージには、ある程度の共通点が見いだされる。

和尚の本に出会う前は、何かこう「自分がいい状態になるのに何かしなくちゃいけないんだ」とか、「何か達成しなくちゃいけないんだ」とか、そういうような枠から抜け出れなかったような気がする（Gさん、男性43歳、80年、27歳の時イニシエーション）。

「知識は重荷だ」という（和尚のメッセージ）にしる、それまでは「もっと勉強して賢くなれば分かるんじゃないか」と思ってただけれど、そうじゃなくって、単純に無垢になっていくことが書いてある（Aさん、男性28歳、88年、20歳の時イニシエーション）。

「存在のあるがままに、ただある」ということが、今まで（教えられてきたことと）180度違う。それまでは理想があつて、ここにただの自分があつて、そこまでいかないとダメなのが・・・全く違うことを言う。自分が求めているのはこれだ、これかも知れないというものを感じた（Wさん、女性30歳、89年、24歳の時イニシエーション）。

「あるがままの自分」、「知識は重荷である」、「何も達成する必要はない」—これらの内容に

共通するのは、今の自分をありのままに受け入れ、無理に何かを達成しようとしたり、知識を詰め込もうとしたりせずに、今、ここにくつろぐことである。

このような内容は、多くの若者にとって、ショックではあるが、緊張を溶きほぐしてくれる内容であったらう。現代の競争社会において専門職に就くためには、多くの積み重ねられた知識が必要であり、その習得には長年の歳月を要する。そのプロセスは、中学、高校、大学、就職しても終わることはない。「何かを達成すれば」、「勉強して賢くなれば」、生きている意味が分かるのではないかという漠然とした期待を抱きながら、気の遠くなるような膨大な知識と技術の習得に時間をかけていくのである。しかし、親の世代の生活を身近で感じると、努力の結果として得られるものにあまり大きな期待はもてないでいる。また、その過程では現在の自分をそのまま受け入れることは容易ではないし、社会からも一人前の人間として認められることはない。以上のような社会的状況を考慮すれば、なぜラジニーシの「あるがままの自分でないさい」、「知識は重荷だ」というメッセージが先進資本主義諸国の若者、特に高学歴層の若者の一部に魅力的であるのかという理由が推測できる。キャリアの達成を義務づけられた若者の一部にとって、ラジニーシの思想は安堵感を与える内容なのである。つまり、ラジニーシの思想と最終的にサニヤシンとなった人達の社会的属性との間には、はじめからかなり強い結び付きがあったことが予想される。

しかし、ラジニーシの本をはじめて読んだ時に大きな衝撃を受けた人達でも、すぐに具体的な行動を起こしたものは皆無に等しかった。本に衝撃を受けたからといって、すぐに瞑想センターやインドに行く人は少ないのである。そこ

にはL-Sモデルの第4の条件である「転機」が必要となる。ラジニーシの信奉者たちは人生の転機に具体的な行動、すなわち日本の瞑想センターやインド・プーナのアシュラム（道場）を訪れている者が多い。いつ、どのような心境になって、行動を起こしたのであろうか。

Gさん（男性43歳、80年、27歳の時イニシエーション）が「どうしてもなくなって行こうと決心した」具体的な転機は、当時任されていた学習塾の講師の職に失望しはじめたことである。その時の心境は以下のものであった。

和尚の『存在の詩』を読む時、読んだ瞬間って、いつも解放感やんか。・・・だけど、また日常に戻ったらさ、また同じようなパターンがみたい。そういう感じがあって、「こりゃ行く以外ないな」みたい、何かそういう感じだった。とにかく和尚のそこ行ってだめだったら死のうみたいに思ってたね。気分的にはね。八方塞がりみたいだね。そういう思いがあった。読んで感動してたけど、読んだ時だけ感動で自分というのは特に変わらないから・・・（本をはじめて読んでから）1年以上あいたと思うよ。どうしてもなくなって行こうと決心したわけ。

ダウントン (Downton 1980) によれば、スピリチュアルな探求の過程で、潜在的な入信者は個人の無力感に直面する傾向にあるという。自分自身の努力によって自己実現を成し遂げようとするほど、自分を変えられない絶望感が大きくなるのである。ダウントンの指摘は、サニヤシンの多くにも当てはまる。例えば上のGさんは、本を読むだけでは変わらない自分に絶望したとも解釈できる。ラジニーシの思想への関心が高まると、本人にとっての理想的な自己像が明確になる。しかし、本を読んで内容には同意するが「変わらない自分」に直面し、絶望

感が増すのである。

多くの場合、直接ORMと接するきっかけとなる転機はそれ程深刻なものではない。しかし、「気分的にはどうしようもない」という感覚が強まっていったのも事実である。また見方によれば、転機が訪れるというより、本人が積極的に現実と関わって転機を作っていくという傾向が強くみられた。大学の春休みや夏休み、卒業旅行を利用してインド・プーナに向かう人や、数年間勤めた会社を自らの意思で退職してインドを訪れる人などがこの例にあたる。

以上の内容を要約すれば、サニヤシンになった人達に共通しているのは、転機が訪れる以前からラジニーシの本に感銘を受けていることである。しかし、本に感銘することに加えて必要になるのは、インドまではるばる訪れるような本人の強い意思や切迫感、さらに具体的な行動を起こせるような転機である⁽¹⁰⁾。第3の条件である探求行為に関して、サニヤシンの積極的な活動が特徴的であったのと同様に、ここでも当事者自らの能動的なコミットメントがORMに特徴的な事項として見いだされたわけである。

5) 対人関係―信奉者およびラジニーシとの関係

L-Sモデルにおける第5、第6の必要条件は、対人関係に関わる内容である。第5の条件は、入信へのプロセスにおいて、将来入信する者とすでに信者である者との間に積極的な人間関係が形成されることである。インタビューをした人達は、サニヤシンとどのように接触していったのであろうか。

ラジニーシの本を読んで感銘を受けた人達は、人生の転機に日本の瞑想センターやインド・プーナのアシュラムを訪れる。その際に、ロフランドらのいう感情的なつながりがサニヤ

シンとの間に形成されている場合が多い。現在では行われていないが、85年までサニヤシンたちは弟子の条件としてオレンジ色のローブや赤系統の服を絶えず身に付け、首からはマラとよばれるラジニーシの写真のはいったロケットをつるした数珠をさげていた。また現在でも、サニヤシンたちはラジニーシから授けられたサンスクリット語の名前で呼びあっている。このような外見は普通の日本人には異様に見えるかもしれないが、はじめて瞑想センターを訪れた人達の第一印象は極めて良好であったようだ。

「うーん、もーここ」という感じだよね。自分が・・・いろんなグルのところに行ってやっとならぶというよりは、むしろ、バックグラウンドなしにいきなり和尚に出会って、全然抵抗がないんだよね。だからそういう縁で会う人とはもうすぐ友達というような気になって・・・(Mさん、男性35歳、80年、21歳の時イニシエーション)

など良い印象をもった人がほとんどである。

ところが、80年代後半になると、はじめてサニヤシンと接した人達はアンビバレントな感覚をもつようになる。80年初頭と比べて、ORMが「宗教っぽい」雰囲気をもちだしたことに起因しているのかもしれない⁽¹¹⁾。86年にはじめて瞑想センターを訪れたTさん(女性34歳、87年、25歳の時イニシエーション)の印象は、以下の通りであった。

最初(サニヤシンを)見た時、「すごい目がきれいな人達だな」と思った。「世間とは違う何かをもっている人達だな」と思って、私が求めてる何かを感じたのね。

ここまでは、80年代初頭に瞑想センターを訪れた人達の印象と違いはない。しかし同時に、実際にサニヤシンがしている行為には抵抗感をおぼえたようである。彼女はこう続けた。

(サニヤシン同士の) ハッグや、和尚の写真みて「ハーッ」と言ってるのは気持ち悪かった(12)・・・(オレゴンの共同体の)ビデオ見せてもらった。嫌悪感もった・・・「あー嫌だ」とか思って。ちょっと宗教じみてる感じがあったからね。

このように、サニヤシンの存在に引かれつつも、ラジニーシとサニヤシンの間で取り交わされる「宗教的な」熱狂には強い抵抗感を感じたようである。

同じような感覚は、日本の瞑想センターのみでなく、インドへ直接行った人にも同様に当てはまった。以下のNさん(男性30歳、92年、26歳の時イニシエーション)は、ラジニーシの考えや瞑想法を高く評価しつつも、サニヤシンにはなりたくなかったという。その理由は以下の通りであった。

自分の限られた、日本人サニヤシンを見ただけの印象でいうと・・・もちろん、いろんな人いるわけで・・・どちらかっていうと特殊な人達という印象。ほくがサニヤシンになることもないし、ただ瞑想をしたいからプーナに来て、そこで自分がやれることをやって身になればいい。・・・本で読んだ和尚の感じと、サニヤシンで和尚が好きだというのは何か違うんじゃないか・・・そんな印象があって。和尚を1つのカリスマじゃないけど、教祖のようにして付いていってる。もちろん、そうじゃない人もいるんだけど・・・「あー、これは信者の集まりなんだな」という印象を受けた。

しかし、Hさんはプーナに6カ月間滞在し、日本に帰国する直前にサニヤシンとなった。

それではなぜ、サニヤシンに対して否定的な印象を抱いたIさんやHさんは、結果的にイニシエーションを受ける決意をしたのであろう

か。その決定的な要因の1つとなるのは、ラジニーシ自身に対する信頼や愛着である。ORMの特異性を理解するためには、この要因を考慮する必要がある。ラジニーシに対する強い信頼ゆえに、他のサニヤシンたちが「宗教的な」振る舞いをして、本人のイニシエーションの決断とは無関係になるのである。

例えば、Yさん(男性36歳、80年、20歳の時イニシエーション)は18歳の時にはじめてラジニーシの本を読み、20歳の時にインドへ向かった。彼は、日本の瞑想センターへは行かなかったが、その理由を以下のように語っている。

(日本の瞑想センターへは)全然行ってない。行きたくなかったから。要するに、ほくが感動したのは、和尚の世界、というか和尚の存在そのもの。そこからの話じゃない?・・・とにかく、直接のエンカウンターを望んでたし、自分の中でその前にそこはどういう場所なんですとか、そういう情報集めとか、あるいは和尚はこうなんだとか、ああなんだとか、別に聞きたいとは思わなかったし、何かけがされるような気がして。

彼以外にも数人の人達は、ほかのサニヤシンやORMの組織的側面へは興味がなかったという。前出のGさんも、和尚との一対一の関係が重要であり、「(他の)サニヤシンの全員が殺人鬼に変身しようとも、ボクはサニヤシンだなど思うし、ほかの人は関係ない」という態度があると語った。

インタビューした人達のほとんどにとって、最初の接触はラジニーシの本である。本を読んで感銘を受けた後にサニヤシンと接触していることになる。多くの人達にとって、最優先事項はラジニーシに会うことであって、その過程でほかの信奉者と接触すると考えたほうが適切で

ある。この点は、ORMに特質すべき事項であろう。換言すれば、サニヤシンはラジニーシの存在や世界観に対する強い関心があるがゆえに、ほかのサニヤシンへの愛着を発達させる傾向が強いのであって、その逆ではないということである。

6) 信者以外との人間関係

ロフランドらによれば、入信への第6の条件は、信者との友好関係の発達に伴って社会一般の人々との絆が弱まっていく、あるいは最初から親や友人との感情的なつながりが弱いことである。インタビューの結果分かったことは、サニヤシンたちはORMと出会う以前から家族や友人との絆が弱い人がほとんどであったことである。

ORMと出会った時に、半数近くの人達は両親と同居していた。その点では、彼らが家族と物理的に孤立した状況で、宗教に引かれていったと言いはし難い。しかし、インタビューをした人達の側からすれば、彼らは「精神的に」家族から孤立していた場合が多かった。例えば、Cさん(女性36歳、80年、22歳の時イニシエーション)は、両親にラジニーシのことを話したことがないという。瞑想センターに通いだして、赤系統の服のみを着始めても、両親は何も聞かなかったという。彼女によれば、「これまで自分が何を考えたり、感じているのかを両親に話したことは一度もないし、また聞かれたこともない」という。この女性ほど極端なケースでなくとも、多くのサニヤシンが家族との関係が疎遠であったことを語っている。

また、友人との人間関係も、家族のそれと同様にあまり密接ではなかったようである。Wさん(女性30歳、89年、24歳の時イニシエーション)は、大学時代を次のように振り返る。

誰にも自分の悩みを打ち明けられずに、大学

の4年間を普通に過ごした。何かあきらめてた。いろいろ疑問をもってもどうなるものでもないから。友達と話しても噂だけ、一番聞きたいことは話せない、自分がいられる場所がない、内側のいらだちがあることをさとられたくないし、言っても分からない。好きな人にもそういうこと言えない。

このような例からも分かるように、サニヤシンとなった人達は以前から家族との絆が弱かったり、悩みを打ち明けられる親友がいなかったことがわかる(13)。

もちろん、仲の良い友人がいても、瞑想センターに通いだすことによって、以前からの友人との関係が希薄になることも事実である。いったんラジニーシの世界観を真実として受け入れ、ラジニーシ流の瞑想法を実践し始めると、彼らの人間関係はそれを分かち合うことのできる人達に限られてくるのである。しかし、一般的な傾向としては以前から家族や友人との強い絆が存在しない場合がほとんどであり、サニヤシンとの対人関係の絆が従来の感情的な絆の欠如を埋め合わせる方向に移行すると考えるのが妥当であろう。

7) 徹底したインタラクションと意識変容の体験

L-Sモデルにおける入信の最後の条件は、具体的に、日々はっきりなしに他の信者と集的に交流することである。これなくしては、真の入信は不可能であるとロフランドとスタークは論じている。完全な入信者とは、本人の意味体系が変容し、思想的にも行動においても特定の宗教の一員となった人々のことである。この正真正銘の信者となるためには、第7の条件を満たさなければならないという。それでは、ORMにおいて、行動の変化をもたらす、正真正銘のサニヤシンとなるための要因は何であろう

か。

Eさん（女性38歳）は84年に当時オレゴンにあった共同体を訪問し、27歳の時にイニシエーションを受けている。しかし、サニヤシンになった前後で考え方や行動が急に変わることはなかったという。このように、ORMの場合、イニシエーションが入信、すなわち行動レベルまでを含む変容と一致しないことしばしばある。サニヤシンたちとの集中的な相互接触を持たなくとも、サニヤシンになることが可能だからである⁽¹⁴⁾。彼女が具体的に変わっていったのは、85年にオレゴンを再び訪れた時に知り合ったサニヤシンや、帰国後日本で参加したセラピーの影響が大きかったようである。「知り合った東京のサニヤシンの人と接することによって、自分がいかに窮屈な生活してるのかを感じはじめた」という。また、グループ・セラピーに参加することによって、「自分の思ったこと出来るっていうか、自由に振る舞えるっていうか、非難されないっていうか、そういうふうな初めての解放感っていうのを感じた」。つまり、サニヤシンとなりラジニーシの本を読み続けたとしても、他のサニヤシンとの交流やセラピーへの参加がなければ、大きな変化はなかったのである。

ORMの参加者たちにとって、イニシエーションを受け自己変容を促進させていく契機となるのは、サニヤシンとのインタラクションに加え、瞑想やグループ・セラピーに参加することである。その参加を通じての意識変容の体験がイニシエーションを受ける決意をするきわめて重要な要因となるのである。サニヤシンたちは、イニシエーションを受ける前の数ヶ月間を集中してラジニーシの開発した瞑想を実践したり、また泊りがけで行われる数日間のグループ・セラピーをいくつか経験している場合が多い⁽¹⁵⁾。

また直接インドに向かう人達も、そこでの最初の2～3ヶ月をセラピーや瞑想に費やし、その後サニヤシンになることを申請するのが一般的である。ここでは、サニヤシンになる前の具体的な実践の様子をいくつか検討してみたい。

Tさん（女性34歳、87年、25歳の時イニシエーション）は、

初めに2泊3日のグループを受けた。・・・よく叫んだよね。ぎゃーって。「私ってもう長いこと、社会の抑圧みたいなのをすごいふっかぶってたのかな。我慢してきたんだなー」っていうことを改めて感じた。

また別の女性であるOさん（32歳、91年、27歳の時イニシエーション）は神戸で2泊3日のグループを受けたが、同様の体験をしている。

そのグループの中でいろんなことやったけど、一番覚えているのは20何年ぶりに泣いたこと・・・途中でグループ出来ないぐらいに。グループ受けてすごく軽くなった。・・・本当嘘のように変わった。

Oさんは、その後プーナに3か月滞在し、その期間中にイニシエーションを受けている。彼女たち以外にも、多くの人達がセラピーでの貴重な体験の数々がきっかけとなって、サニヤシンとなるべくプーナに向かっている。

直接インドに向かった人の場合もみてみよう。Fさん（男性42歳、81年、27歳の時イニシエーション）は81年にプーナを訪れ、6ヶ月間滞在した。初めて訪れたアシュラムでは全く違和感を感じず、「はじめて生きているという感じ」がしたという。そこにいた6ヶ月の日常は、

5時に起きてダイナミック⁽¹⁶⁾、おらおらしたり、友達と話して、グループ受けて、マリファナもはじめて吸った。エンライトメン

ト・インテンシブ(17)を受けて、はじめてハイになるという感覚をもった。・・・はじめて自分が自由になれた感じがした・・・何か探求して生きているという感じ。(80年当時は)今よりも、もっともっと開放的な感じだった。ギターを町でひいて踊りだしたりとか、バンブーハットから5分位歩いて泉まで真っ裸で歩いていたり、・・・すべてが生きているという実感だった。

その当時のグループは、初日から全裸になることが一般的であった。アシュラム内のシャワーとトイレも男女の区別はなく、「人とのつきあひも、ものすごく近い感じになった」という。彼は瞑想の後、強烈な神秘体験をしている。

瞑想の後に、お腹のところに白い光るエネルギーを感じる。背骨からエネルギーがワープとなって、それが3日続く。すべてが美しくみえて、何をやっても深い感じがする。そのあと別人みたいになって、しばらくはものすごく深いレベルから動いているような感じになる・・・今から思うと、あの体験があったからサニヤシンを続けられたような気がする。・・・日本に戻っても、おまえは一番変わったと言われた、半年前の自分と違うと。

ほとんどのサニヤシンは、セラピーや瞑想の最中に、これまでの人生で経験したことのないような体験をしていた。このような体験をすることにより、彼らはラジニーシに対する信頼を深め、イニシエーションを受ける決意を固めていくのである。それと同時に、サニヤシンとしてあり続けていく拠り所となっていくのである。前述したFさんの、「今から思うと、あの体験があったからサニヤシンを続けられたような気がする」という言葉は内的体験の重要性を如実に表わしている。

以上の考察の結果、サニヤシンとなるために

は、L-Sモデルが提示する信奉者との徹底的なインタラクションに加え、セラピーや瞑想における意識変容の体験が重要であることが理解できた。セラピーや瞑想での体験を通じてラジニーシの世界観を知的にではなく感覚として理解し、さらにサニヤシンたちとの接触を通じてラジニーシ的なライフ・スタイルを社会化していくのである。

5. まとめ

本稿では、ORMの参加者たちが、どのようなプロセスを経てイニシエーションを受けるに至るのかをL-Sモデルに準拠しながら論じてきた。その際、サニヤシンの生の声をできるだけ織り混ぜながら彼らの内面的世界の理解にも迫ろうと試みてきた。本研究の考察の結果明らかになったことは、彼らはORMと出会う以前に人生の目標の欠如や意味の喪失といった精神的な問題に直面していたこと、その問題を「新靈性運動」的なパースペクティブから解釈しようとしていたこと、そして現代的な宗教現象におけるスピリチュアルな探求者として具体的な行動をしていたということである。またORMとの出会いは本を通じて行われ、はじめて読んだときから強烈な衝撃を受けていること、そして人生の転機に具体的な行動に移し、サニヤシンやラジニーシへの信頼を次第に強めていくことである。さらに、イニシエーションする前の一定期間に、集中的に瞑想やグループ・セラピーに参加し、そこでの意識変容の体験を通じてラジニーシが提唱するライフ・スタイルに対する確信を得ていくのである。

ORMの事例研究においては、L-Sモデルが示す入信プロセスの7つの条件はきわめて有効であったが、L-Sモデルでは把握できない

サニヤシンに特徴的な性質は次の5点である。1)サニヤシンとなった人々が以前からもっていたパースペクティブや探求行為は、「宗教」を広義に解釈して「スピリチュアル」と捉える必要があること、2)サニヤシンとなった人達が直面した人生の転機とORMとの出会いの時期は必ずしも一致せず、ラジニーシの本を読んだの衝撃的な感動が先行すること、3)サニヤシンは他のサニヤシンとの友好関係に加え、ラジニーシに対する信頼・愛着を最優先事項として捉えていること、そして4)正真正銘のサニヤシンとなるためには、他の信奉者との徹底的なインタラクションに加え、セラピーや瞑想での意識変容の体験がきわめて重要な要因となることである。また、以上の4点とも重なるサニヤシンの特徴として、5)彼らの状況への積極的な関与が挙げられる。行為者の能動的な側面は、他の新宗教への入信過程においても当然みられるが、ORMの参加者の場合、この傾向が顕著である。それは、ORMと出会う以前の彼らの積極的な探求行為にも、自らの意思で転機を作ってもインドまで行こうとする点にも、また自己変容を促進させるためにセラピーや瞑想への徹底的な参加をする仕方にも如実にあらわれている。

本稿では、日本人サニヤシンがイニシエーションを受けるまでのプロセスの分析に焦点をおいた。以上の研究成果に基づく、今後の研究課題を2点あげておく。第1の課題は、入信プロセスの研究をサニヤシンになるところまでで完結させず、むしろサニヤシンでありつづけるプロセスにも焦点をおくことである。ダウントン(Downton 1980)が指摘するように、入信のプロセスは非常にゆるやかなものであり、突然価値観や行動様式が変化するものではない。また、急激に変容したかにみえる価値観も、日常生活の中で次第に以前のパターンに押し戻されてい

ってしまうのが現状なのである。サニヤシンたちがイニシエーションを受けた後、どのように一般社会とかかわり、いかにラジニーシの提唱するライフ・スタイルを維持・発展させていくのかを理解する必要がある。特に新宗教運動への入信者の大半が、2年以内に一時的な熱狂からさめ関心がはなれていってしまう現状(Levine 1984)を考慮すればなおさらである。換言すれば、最終的にサニヤシンとなった人達が、L-Sモデルが提示する7つの条件をクリアしてイニシエーションを受けるに至ったように、彼らがサニヤシンであり続けるためにはさらなる条件を満たしていかなければならないはずである。

第2の課題は、本稿で検討したサニヤシンの内面的世界の、どこまでが日本人サニヤシンに特異なものであり、いかなる点が世界中の信奉者たちに共通する特徴であるのかを特定することである。また、どこまでが他の新宗教運動の参加者や「精神世界」の支持者に共通するものであるのかも究明していく必要がある。このような研究課題は、ORMの把握にとどまらず、より一般レベルで、現代日本の社会的性質がいかなるもので、またそこで生活する個人はどのような意識を持っているのかを理解するうえで、大きな手がかりになるものと思われる。さらに、先進資本主義諸国に共通した社会基盤と個人意識、および欧米とは宗教文化を異にする日本の特異性との解明にも貢献できるのではないだろうか。

(付記) 本研究は、庭野平和財団平成6年度個人研究助成の成果の一部である。本稿の内容は、アメリカ宗教社会学会 (Association for the Sociology of Religion、ワシントンDC、95年8

月19日)にて報告し、伊藤(1995)にて研究助成報告を行った。本稿は、前稿に大幅な加筆をし、新たな分析を加えたものである。

註

- (1) 新宗教運動全般、およびそれへの入信に関する包括的なレビューとしては、Machalek and Snow (1993)、Robbins (1988)、Snow and Machalek (1984)、杉山 (1995) を参照されたい。また、日本の新宗教への入信に関しては、井上 (1981)、井上・島薺 (1985) が挙げられる。
- (2) ラジニーシの本のうち40数冊のが現在までに翻訳され、『存在の詩』(めるくまー社)は4万9千部売れている。
- (3) 本稿では、「入信」(conversion)を「自らの基本的な意味体系の変化に伴う自己の変容」(McGuire 1992: 71)として理解する。これに対して、「入会」(recruitment)は、「宗教集団への加入(メンバーシップの取得)」(渡辺 1990: 202)を意味するものとする。したがって、入会には、入信にとって不可欠な要因である意味体系の変化は必ずしも伴わないので、この2つの概念は明確に区別して使用する。また「イニシエーション」は、「サニヤシンになること」を意味し、入会に近い意味で用いる。
- (4) 創始者は、バグワン・シュリ・ラジニーシとして長く知られていたが、89年以降は和尚(オシヨ)とのみ呼ばれている。なお、ORMの概要に関する日本語の文献としては、井上(1995)、伊藤(1997)を参照されたい。
- (5) L-Sモデルに関する理論的・実証的な有効性をめぐる論文としては、Downton(1980)、伊藤(近刊)、Snow and Phillips(1980)などが挙げられる。
- (6) 人生の目標の欠如や意味の喪失は、宗教に入会する若者だけに特徴的というよりは、現代の一般的な社会状況として理解すべきである。NHKは1973年以降、5年ごとに日本人の「衣食住」と

いう個人生活の物質面と「生きがい」という精神面の満足感の意識調査を実施してきた。最近の調査結果によれば、若年層においては、過去15年間で、物質面での満足感が大幅に増えた。これに対して、精神面での満足感は78年以降は減少の傾向が見られる。つまり、物質面の満足と精神面のそれとのずれが目立つようになってきたのである(NHK1991a:111)。

- (7) フラワー・チルドレンとは、ヒッピーの俗語である。
- (8) マハリシ・マヘッシ・ヨギ(1911~)のことで、彼の開発した「超越瞑想」は世界中で数百万人が受講しているという。
- (9) 『存在の詩』はラジニーシの本の最初の訳であり、77年に出版された。現在まで4万9千部が売られ、ラジニーシの出版物の中ではベスト・セラーを記録している。
- (10) 欧米の入信に関する社会学的研究において、入信者は受動的な存在として捉えられてきた。しかし、70年代後半から、信者の能動的な側面を強調するアプローチが現われ始めた。その理論的な背景に関しては、伊藤(近刊)、Richardson(1985)を参照されたい。
- (11) 81年にラジニーシは突然アメリカに渡り、オレゴン州に実験的な共同体を設立した。アメリカに本拠地のあった85年までの4年間、ORMの組織はラジニーシの個人秘書であったシーラにより統制され、組織化していった。アメリカの共同体が解散し、インドに再び本拠地が移転した87年以降、ORMは従来の個人的ネットワークを重視するようになった。しかし外部からは、グルに熱狂する宗教集団として捉えられる要素を残している。
- (12) ハッグとは「軽い抱擁」を意味し、サニヤシンたちの間では挨拶の手段として男女の別に関わりなく日常的に行われる。また、サニヤシンの一部

では、ラジニーシの写真を見て「ハー」と深い呼吸をして自らのハートを感じる人達もいる。

- (13) 現代日本社会の若者の中で、家族や友人との関係が希薄であることは、宗教に入会する人達だけに特有の現象ではない。若者の中である一定の割合の人達は同様の感情を抱いていると思われる。友人との人間関係に関するデータをみてみたい。NHK世論調査部が87年に実施した、「中学生、高校生の生活と意識に関する調査」によれば、「あなたには親友がいますか。」という問いに対して、1.6%は親友はいないと答えたが、6.9%が親友が1人、39.9%が2～3人、33.0%が4～9人、18%が10人以上と回答した。この結果をみる限り、98%以上の中学・高校生は少なくとも一人は親友がいるということになる。しかし、もう一步踏み込んだ「あなたは日頃、親友とどのようにつきあうか」という問いに対して、59.4%の人達は「なんのかくしだでもなくつきあう」と答えたが、24.1%は「心のふかいところを出さないでつきあう」、12.9%は「ごく表面的につきあう」という回答をした(NHK 1991b:95)。つまり、現代の中学・高校生のほとんどは少なくとも1人は親友がいるが、そのうちの3分の1の人達は、友人と心の深いところを分かち合うことなく日常を過ごしていることになる。潜在的なサニヤシンは、若年層の3分の1が属するカテゴリーに含まれる人達が多いことになる。
- (14) ORMにおいては、通常、集中的な瞑想やセラピーに参加した後でなければイニシエーションが許可されない。しかし、サニヤシンになる申請をすれば簡単にイニシエーションを受けることができる場合も例外的にある。またORMでは、メールでの申請によりサニヤシンになることも原則的には受け入れている。
- (15) ラジニーシは、自己変容を促進する手段としてさまざまな瞑想テクニックを開発した(Rajneesh

1981)。彼によれば、瞑想とは自我のメカニズムである思考が停止した沈黙の状態のことである。東洋の伝統では、静かに座って思考を観照することが瞑想であった。しかし、ラジニーシが開発した瞑想法の多くは、思考の動きをより観察しやすいように体の動きを瞑想の中に取り入れて、肉体の緊張を解き放ち、それから感情や思考というより微妙なエネルギーの層に働きかけ、最後に沈黙となっておわるという構成になっている。

瞑想の実践に加え、ラジニーシはサニヤシンたちにグループ・セラピーに参加することを薦めた。インドのアシュラムや世界各地の瞑想センターで行われているセラピーの大半は、欧米で60年代後半から70年代にかけて広がったヒューマン・ポテンシャル・ムーブメント(Human Potential Movement、以下HPMとする)に由来するものである。HPMは、人間性心理学の代表者であるカール・ロジャース、アブラハム・マズロー、フリッツ・パールズ等のアプローチや、実存主義哲学、禅の影響を受けている(Stone 1976)。70年代にHPMに関わる多くのセラピストたちが、その新しい可能性を求めてラジニーシのもとに集まり、彼のもとでセラピーを行うようになった。アシュラムや瞑想センターで行われるセラピーの目的は主に2つある。1つは、怒りや恐怖、嫉妬等の抑圧された感情を見つめ、感情のブロックを取り除いてエネルギーが流れるようにすることである。2つめは、ありのままの自分自身にくつろぎ、気付きを高めていくことである。アシュラムでは、ホリスティック心理学のほとんどすべてのセラピーを受けることができる。グループは数日から6週間、トレーニング・コースは数週間から3ヵ月にわたって行われる。なお、ラジニーシのアシュラムで行われるセラピーの詳細に関しては、Amitabh(1982)を参照されたい。

- (16) ダイナミック瞑想のこと。ラジニーシが開発し

た数ある瞑想法の中でも、最もポピュラーなもの
の1つである。アシュラムや各国の瞑想センター
では通常、朝の瞑想として行われる。

(17) グループ・セラピーの1つであり、1日18時

間、3日間にわたって泊りがけで行われることが
多い。グループでは「私は誰か」という問いをさ
まざまな方法で問いかけていく。

[参考文献]

- Amitabh, Prem. 1982. "Shree Rajneesh Ashram: A Provocative Community." *Journal of Humanistic Psychology*, 22, 19-42.
- Bellah, Robert. 1976. "The New Religious Consciousness and the Crisis of Modernity." Pp. 333-352 in C. Glock and R. Bellah (eds.), *The New Religious Consciousness*. Berkeley: University of California Press.
- Carter, Lewis. 1990. *Charisma and Control in Rajneeshpuram: The Role of Shared Values in the Creation of a Community*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Courtis, Mary. 1991. "Self Transformation and Gendered Experience among Rajneesh Sannyasins and Ananda Margiis." Unpublished doctoral dissertation, University of Oregon, Eugene.
- Downton, James. 1980. "An Evolutionary Theory of Spiritual Conversion and Commitment: The Case of Divine Light Mission." *Journal for the Scientific Study of Religion* 19 (4): 381-96.
- 井上順孝 1981 「新宗教の受容と態度変容」井上順孝、孝本貢、塩谷政憲、島蘭進、対馬路人、西山茂、吉原和男、渡辺雅子編 『新宗教研究調査ハンドブック』 雄山閣出版
- 井上順孝 1995 「バグワン・シュリ・ラジニーシ」朝日新聞社編 『二十世紀の千人 第8巻 教祖・意識変革者の群れ』 朝日新聞社
- 井上順孝・島蘭進 1985 「回心論再考」上田閑昭・柳川啓一編 『宗教学のすすめ』筑摩書房
- 伊藤雅之 1995 「外来新宗教への入信プロセスの研究--ラジニーシ・ムーブメントの場合」『平和と宗教』14号
- 伊藤雅之 1997 「和尚ラジニーシ・ムーブメント」井上順孝編『世界の宗教101物語』新書館
- 伊藤雅之 近刊 「入信の社会学--その現状と課題--」『社会学評論』
- Latkin, Carl. 1992. "Seeing Red: A Social-Psychological Analysis of the Rajneeshpuram Conflict." *Sociological Analysis*, 53: 3, 257-271.
- Latkin, Carl., et al. 1987. "Who lives in Utopia? A Brief Report on the Rajneeshpuram Research Project." *Sociological Analysis*, 48: 1, 73-81.
- Levine, Saul. 1984. "Radical Departures." *Psychology Today*, 18: 138-53.
- Lofland, John and Rodney Stark. 1965. "Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective." *American Sociological Review* 30: 862-75.
- Machalek, Richard and David Snow. 1993. "Conversion to New Religious Movements." Pp. 53-74 in D. Bromley and J. Hadden, eds., *The Handbook of Cults and Sects in America*. Greenwich CT: Association for the Sociology of Religion and JAI Press.
- McGuire, Meredith B. 1992. *Religion: the Social Context* (3rd edition). Belmont, CA: Wadsworth.
- NHK世論調査部編 1991a 『現代日本人の意識構造』日本放送協会
- NHK世論調査部編 1991b 『現代中学生・高校生の生活と意識』明治図書

- 西山茂 1986 「新新宗教の出現」 宮家準、孝本貢、西山茂編 『日本の社会学 19 宗教』 東京大学出版会
- Palmer, Suzan. 1988. "Charisma and Abdication: A Study of the Leadership of Bhagwan Shree Rajneesh." *Sociological Analysis*. 49, 2: 119-135.
- Palmer, Suzan. and Frederik. Bird. 1992. "Therapy, Charisma and Social Control in the Rajneesh Movement." *Sociological Analysis*. 53: S S71-S85.
- Rajneesh, Bhagwan Shree. 1975. *Tantra: the Supreme Understanding*. India: Rajneesh Foundation. =1977 スワミ・プレム・プラブダ訳 『存在の詩』 めるくまーる社
- . 1981. *The Orange Book: the Meditation Techniques of Bhagwan Shree Rajneesh*. Rajneesh Foundation International: Oregon. =1984 スワミ・トシ・ヒロ訳 『オレンジ・ブック』 めるくまーる社
- Richardson, James T. 1985. "The Active vs. Passive Convert: Paradigm Conflict in Conversion/Recruitment Research." *Journal for the Scientific Study of Religion*, 24 (2): 163-79.
- Robbins, Thomas. 1988. *Cults, Converts, and Charisma*. Beverly Hills, CA: Sage.
- 島蘭進 1992a 『現代救済宗教論』 青弓社
- 島蘭進 1992b 『新新宗教と宗教ブーム』 岩波書店
- 島蘭進 1996 『精神世界のゆくえ--現代世界と新霊性運動--』 東京堂出版
- Snow, David. and Richard Machalek. 1984. "The Sociology of Conversion." *Annual Review of Sociology* 10: 167-90.
- Snow, David and Cynthia Phillips. 1980. "The Lofland-Stark Conversion Model: A Critical Reassessment." *Social Problems* 27: 430-47.
- Stone, Donald. 1976. "The Human Potential Movement." Pp. 93-115 in C. Glock and R. Bellah eds, *New Religious Consciousness*. Berkeley: University of California Press.
- 杉山幸子 1995 「回心論再考--新宗教の社会心理学的研究に向けて--」 日本文化研究所研究報告 第31集
- Volinn, Ernest. 1985. "Eastern Meditation Groups: Why Join?" *Sociological Analysis*. 46: 147-156.
- Wallis, Roy. 1986. "Religion as Fun? The Rajneesh Movement." In *Sociological Theory, Religion and Collective Action*. Belfast: Queen's University Press.
- 渡辺雅子 1990 「入信の動機と過程」 井上順孝、孝本貢、対馬路人、中牧弘允、西山茂編 『新宗教辞典』 弘文堂

(いとう まさゆき)